平成27年10月６日発行　通巻200号

神奈川県立歴史博物館だより

OCT. 2015
Vol.21 NO. 2

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

国宝「一遍聖絵」第五巻第五段　こふくろさかの場面　清浄光寺（遊行寺）所蔵

目　次

花の事は、はなにとへ
－ 特別展「国宝　一遍聖絵」によせて － …… 2

特別展「石とかながわ」（仮称）ただいま準備中！ …… 6

花の事は、はなにとへ

― 特別展「国宝　一遍聖絵」によせて ―

古川　元也

はじめに

藤沢片瀬浜の地蔵堂で、一遍は踊り念仏に集う群衆から「紫雲たちて、花ふりはじめ」た奇瑞について尋ねられます。そのときの答えが「花の事は、はなにとへ」（第六巻第一段）。かながわゆかりの片瀬浜の場面を含む「一遍聖絵」（以下「聖絵」とも）第四、五、六、十巻が、神奈川県立歴史博物館で今秋展示されます。これは、管理者である遊行寺宝物館、県立金沢文庫とともに三会場で四巻ずつ全巻（十二巻）を展示する特別展「国宝　一遍聖絵」の一会場として展示するものです。奇瑞の理由を知っていたはずの一遍はなぜ教え諭（さと）さなかったのか。周到に計算された、国宝「一遍聖絵」の魅力について考えてみたいと思います。

一　　一人のすゝめによりて

「一遍聖絵」は時宗（当時は「時衆」と表記）の開祖、一遍智真の生涯を描いた絵巻です。国宝としての指定名称は「一遍上人絵伝」となっていますが、近年は絵巻の題箋（タイトル）にみえる「一遍聖絵」とすることが多いようです。第十二巻第三段には「一人のすゝめによりて」この絵巻が作成されたと記されていますが、この「一人」の意味は諸説あって定まっていません。奥書から正安元年（1299）、一遍の弟子聖戒が本文を起草し、法眼円伊が絵を担当したことは分かります。詞書（ことばがき・本文）の書体は少なくとも四種類に分けられることから、複数の能書家が執筆を担当し、絵も円伊のもと、高度な技術を持つ名手たちによって制作されたとみてよいでしょう。絵巻の素材には紙が用いられることが多いのですが、「聖絵」は絹を用いていることが特異です。画絹を用いた絵巻としては日本で最古の作品です。

一遍は、伊予国（愛媛県）の人で、鎌倉時代の武士として有名な河野氏の出身であるといわれています。松山の道後温泉近くにある中世城跡湯月城（国指定史跡）は一族の本拠地で、史跡内に安置される鎌倉時代の石造湯口（図１）には、一遍が刻んだとされる「南無阿弥陀仏」の文字が残ります。弘法大師など高名な宗教者が湯や水の供給者として語られる伝説は多く、一遍が貴賤を問わず布教に努めたことを物語っているのでしょう。絵巻には若い一遍が、父・河野通広に見送られて伊予から出立する様子（第一巻第一段）や、江刺（岩手県北上市）にある祖父河野通信の墳墓を訪う姿も描かれています（図２、第五巻第三段）。

二　あめとていとふ人ぞはかなき

宗門開祖の行状を描く絵巻は、顕彰や秘蹟の記録伝承を目的にすることが多いようです。しかし、「聖絵」はいくぶん様子が異なっており、風景だけが描写されることもしばしばです。たとえば、下野国（栃木県）小野寺の場面（図３、第五巻第二段）では、枯れた葦原が広がる北関東の早春の、寒々とした水辺の風景が描かれます。詞書にはにわか雨に降られた一行と、それを物ともしない一遍の強さが詠まれます。宗祖の顕彰とは直接に関係を持たないこのような場面は、間接的に一遍の決意の強さと、遊行した道のりの険しさを想起させます。画面には計算し尽くされた風景描写が効果的に挿入されているともいえます。

一遍自身の描写も、特別視というよりはむしろ人々の中の一員として描写されることもあります。たとえば、神奈川県ゆかりの風景を描いた、鎌倉「こふくろさか」と「片瀬浜」の場面。一遍と同行の集団が念仏を唱えながら鎌倉へと至る街道をたどり、太守（執権北条時宗とも）は一遍らの鎌倉入りを拒みます（表紙口絵、第五巻第五段）。その後、片瀬浜（藤沢市）で踊り念仏を行う一遍の一行（図４、第六巻第一段）。集団の前面にたつ一遍と、集団に同化する一遍の両方が見て取れます。片瀬では、材木を組んだ板敷の質素な小屋で

図１　石造湯口

図２　第五巻第三段　河野通信墳墓

踊り念仏が興行され、見物する群衆が小屋を取り巻いています。一遍は念仏僧らと同化し、踊り念仏の一体感が描かれます。一方、密集感をもって描かれている見物人は、一人一人に目をこらせば、それはそれで細密に描き分けられ、中世都市鎌倉に暮らす人々を教えてくれます。紫雲から降り注ぐ散華の不思議を尋ねられても、一遍は教え諭すことはありません。「聖絵」は、一遍の生涯を描きながらも師の顕彰を誇張せず、抑制された風景の中に一遍を放置することによって、捨聖（すてひじり）としての遊行の厳しさを表している絵巻だと思います。

三　その札をくばるべし

次々と登場する一遍ゆかりの場所や寺院は、宗祖“遊行”の事実を淡々と記録しているようにもみえます。細密に描かれた名所の数々を見ていると、ちょっとした旅行気分が味わえるのではないでしょうか。名所の図案は、絵師の工房にあったものでしょうが、「聖絵」には、それらが一遍の生涯にあわせて破綻なく描きこまれ、名所絵的なものになっています。たとえば、一遍は紀伊国（和歌山県）熊野の山中で熊野権現に出会い、賦算（「南無阿弥陀仏」などと書かれた紙片を授ける）を認められて、遊行の継続を決意します（第三巻第一段）。時宗ではこの出来事を開宗の契機としており、熊野三山の果たす役割は非常に大きいのです。熊野権現からの啓示を語るためには、その場面だけでも良さそうなものですが、絵巻には本宮、新宮（速玉）、那智の三社が克明に描かれ、三山のもつ建築的威厳や神域としての清浄さを十二分に伝えてくれます。名所の全体を描いてしまうわけですから、熊野権現にひざまずく一遍の姿は非常に小さくなります（図 5）。名所の中の一遍を描く場面構成は、「聖絵」全体を通じて見られ、結果として、一遍自身は抑制されて描かれます。

四　奇岩怪石の連峰

全体の風景を大切にする「聖絵」は、人物の描写こそ小さくなりますが、描写の緻密さ、細密さで補われ、当時の人々の姿を存分に伝えてくれます。片瀬の場面を再度見ていただければ、わずか数センチの人物に描きこまれた豊かな表情、持物や調度品の細密な描写が尋常でないことがわかります。この細密な描写は、中世の暮らしや習慣、風俗を知る手がかりを、歴史研究者や民俗研究者など多くの現代人に与えてくれます。展示には単眼鏡をご持参いただくのもいいでしょう。

緻密な描写があるかと思うと、水墨画のような荒々しい自然の表現も現れます。このような山水描写は宋画の影響を受けているともいわれており、緻密さと荒々しさが破綻なく調和しているところはさすがです。一遍の伊予修行時代、菅生岩屋の場面は好例といえるでしょう（図 6、第二巻第一段）。奇岩怪石の連峰山中にある不動堂と仙人堂は細密に描かれ、仙人堂の内部に籠もる一遍と聖戒の姿までをも克明に描きます。一方、堂舎のある山中の景色は、緩急の息づかいが感じられる筆線で水墨画的に幾分粗く描かれます。一遍聖絵の写実的とも理想的ともとれる独特な描写の雰囲気は、この調和の妙によってもたらされているのでしょう。ちなみに、岩屋は松山市内から車で 1 時間ほどのところにあります。現地に行くと、原風景を比較的忠実に描いていることに驚かされます（図 7・8）。

五　立意を以て宗となし、能文を以て本となさず

絵ばかりに注目があつまる「聖絵」ですが、絵巻は詞書と絵とで成り立つ作品ですから、詞書にも注目すべきだと思います。「能文を以て本となさず」と、教えの脚色を嫌った作者ですが、詞書を起草した聖戒は、一遍の死後十年を経て、一遍の遊行同行者とともにその足跡を再踏破したといいます。「聖絵」詞書の制作には、相応の綿密な取材があったものと思われます。一遍の遊行は、結果として絵と詞で記録されたのです。展示では詞書部分も展示します。丁寧に書かれた文字は読みやすいので、読解に挑戦してみてください。

また、見どころは詞書が記された料絹にもあります。普段はなかなかお目にかかることのない部分ですが、赤、青、黄、白、緑など数種類の色で鮮やかに地塗りが施されています。雪景色のあとに白い料絹を継ぐなど、制作に意図が働いていることは明らかです。料絹表面には、草花文などの地紋が施され、その季節感は風景と呼応しているようにも思われます。非常に手の込んだ、見せる詞書は平安期絵巻物の名残もとどめています。

おわりに　千載の領袖にあらざらむかも

「聖絵」は、一遍の行状が千年後の人々の導き手（千載の領袖）とならないことがあろうか、として締めくくられます。描かれた遊行のありさまをじっくり鑑賞していただくことにより、宗教者一遍を理解していただけるのではないでしょうか。本年 10 月 10 日に遊行寺宝物館がリニューアルオープンし、全巻は開館を記念して遊行寺宝物館で展示されます（場面替あり）。11 月下旬からは全巻を 3 会場に分け、多くの場面をご覧いただけます。県立歴史博物館では第四、五、六、十巻を 11 月 21 日（土）より、同金沢文庫では第二、三、八、九巻を 11 月 19 日（木）より展示します。一部例外はあるものの、通常「一遍聖絵」の公開は一年に一巻一場面 2 週間と限定していますから、今回の展示はまさに千載一遇の好機です。是非お見逃しなく。

（ふるかわ　もとや・主任学芸員）

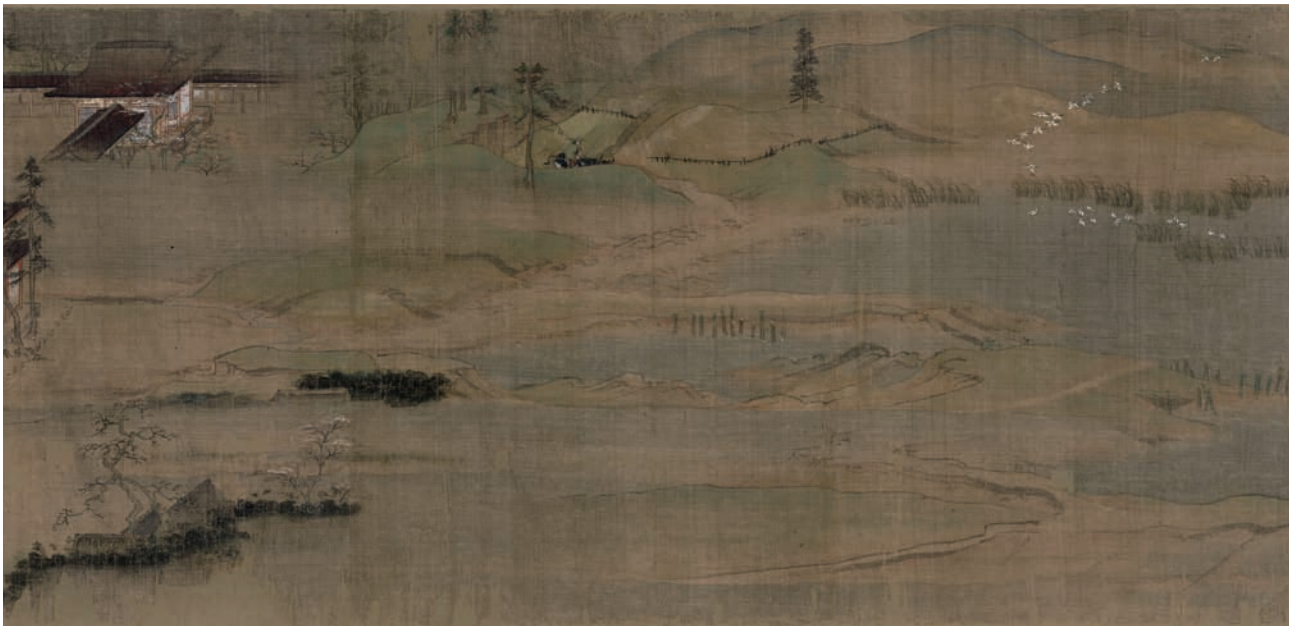

図３　第五巻第二段　下野小野寺
11 月 21 日からは県立歴史博物館で展示

図４　第六巻第一段　片瀬浜
11 月 21 日からは県立歴史博物館で展示

特別展

国宝　一遍聖絵

会　期
第１会場　遊行寺宝物館　平成 27 年 10 月 10 日（土）～ 12 月 14 日（月）
休館日：毎週火・水・木曜日（11 月 3 日は開館）
第２会場　神奈川県立歴史博物館　平成 27 年 11 月 21 日(土)～ 12 月 13 日(日)
休館日：毎週月曜日（11 月 23 日は開館）
第３会場　神奈川県立金沢文庫　平成 27 年 11 月 19 日（木）～ 12 月 13 日（日）
休館日：毎週月曜日（11 月 23 日は開館）、11 月 24 日

図５　第三巻第一段　熊野本宮（画面中央に権現と一遍）
11 月 19 日からは県立金沢文庫で展示

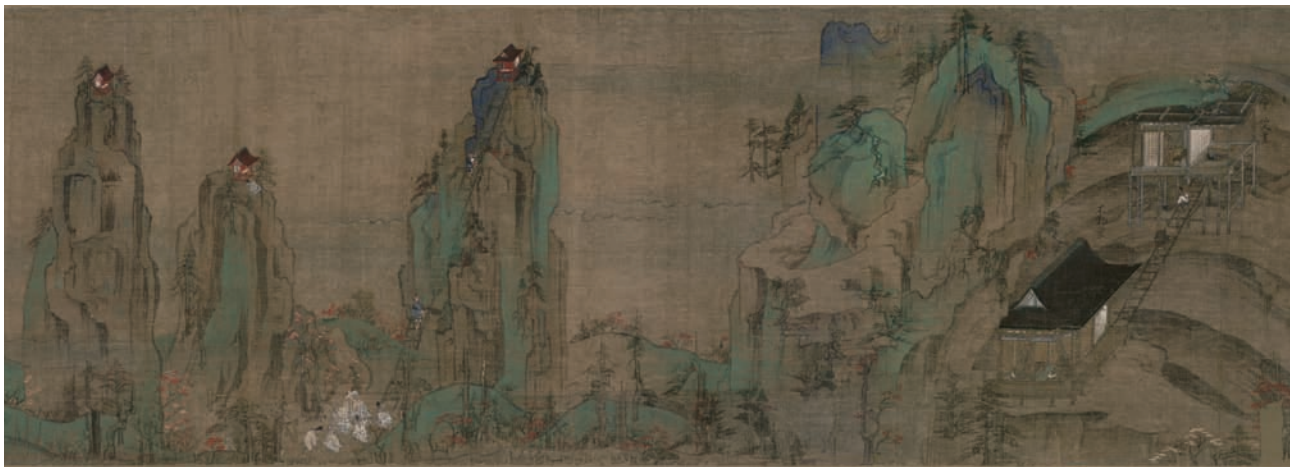

図６　第二巻第一段　菅生岩屋
11 月 19 日からは県立金沢文庫で展示

図７　現在の菅生岩屋遠景

図８　菅生岩屋仙人堂跡

特別展「石とかながわ」（仮称）ただいま準備中！

丹治　雄一　・　新井　裕美

はじめに

当館では、来年２月６日から３月27日まで特別展「石とかながわ―時代の変革を彩った石の文化―」（仮称）の開催を予定しています。本展では、考古学、中世史、近現代史、民俗学を担当する４名の当館学芸員に、地質学・岩石学を専門とする神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員も加わり、かながわにおける旧石器時代から現在に至る人と石との関わりを多角的に展示したいと考えています。

ここでは、展示準備の中間報告として、かつて神奈川県内で産出したふたつの石材の歴史をご紹介します。厚木市から産出した「七沢（ならさわ）石」と、湯河原町産の「白丁場（しろちょうば）石」です。（丹治）

１　庶民の生活や信仰に密着した石材「七沢石」

かながわの大地をかたちづくる岩石は、旧石器時代以来石材としてさまざまな用途で使われてきました。その中には庶民の生活や信仰に密着した石材もありました。そのひとつが江戸時代から昭和の戦後にかけて300年以上も採石されていた厚木市七沢（ななさわ）を中心に産出する「七沢石」です。

七沢石は主に丹沢山麓東側の鐘ヶ嶽（かねがたけ）から切りだされた石材です（図1）。地層では丹沢層群煤ヶ谷（すすがや）亜層群大沢層・谷太郎層の火山礫凝灰岩（かざんれきぎょうかいがん）（海底火山から噴出した火山灰が堆積して石になったもの）にあたり、多数の塊状の火山礫を内包しているのが特徴です。また、七沢に近接する伊勢原市日向では「日向石」、清川村煤ヶ谷では「煤ヶ谷石」の採石が行われていましたが、これらはいずれも同じ地層群に属し、七沢石と称することもあります。

七沢石の採掘が始められた年代は定かではありませんが、平塚市博物館編『街の中の石材―地球からの贈り物―』（2000年）および平塚市博物館編『平塚の石仏―改訂版―4　金目地区編』（2003年）によれば、七沢石でつくられた県内に現存する石造物に万治２（1659）年３月27日の銘がある平塚市北金目の不動院の地蔵などがあることから、江戸時代前期にはその採掘が認められます。その後江戸時代中期以降になると七沢石を使用した石造物が盛んにつくられるようになります。その要因には、経済的に豊かになった庶民の様々な信仰の隆盛とそれに応えた信州高遠（たかとお）（現長野県伊那市）からやって来た石工たちや地元の石工たちによる採掘と製品づくりがあります。当時の高遠藩領は山間地で耕地が狭く、農耕だけでは生計が立ちゆかなかったため、藩の政策として年季を定めた出稼ぎが奨励されていました。藩の財政を補うために農間の余業として出稼ぎに出た石工などの職人の稼ぎ高には運上金（税金）が課せられていました。石工職人は信州・甲州・上州・相州・武州・駿州・濃州など各地へ出かけ、自らの名前や製作年代を刻んだ路傍の石仏・石鳥居・手水鉢などの石造物を残しています。神奈川県内にも高遠石工の銘が刻まれた石造物が多数あり、特別展では高遠石工の県内での活動に焦点を当てていきたいと思います。

七沢石でつくられた製品には、前述の路傍の石造物以外にも臼や墓石などがありました。七沢石は戦後の昭和30年代後半まで採掘が行われていました。その後は外国製の石材やコンクリートにその役割が代わられたため、現在では七沢石の採掘は行われていませんが、今でも石切り場の名残を見ることができます。本展の調査のため今年４月にかつての石切り場跡を訪れた時には、足元に転がる石の中に矢（楔（くさび））を入れて割った石（図２）や途中まで成形しかけた石、石垣等が残り、その近くにはかつてそこに石切り場があったことを示す石碑が建っています（図３）。

当館には、神奈川県指定有形民俗文化財である「神奈川の職人の道具」コレクションがあり、厚木市七沢の他に鎌倉市今泉・真鶴町岩で使用されたものも含めて、合計178点の石工職人の道具を所蔵しています。石工の道具には、採掘や加工、製品の製作などの工程に応じてそれぞれ使用する道具があります。石工の道具や石製品の詳細は紙面の都合でご紹介できませんが、特別展ではそれらも展示する予定です。（新井）

２　近代洋風建築に用いられた石材「白丁場石」

白丁場石は、おもに明治時代中期から昭和戦前期にかけて箱根火山の麓にあたる足柄下郡吉浜村（現湯河原町）鍛冶屋から切り出されていた安山岩です（図４）。日本銀行本店（1896年、辰野金吾設計）や現在当館の建物となっている横浜正金（しょうきん）銀行本店（1904年、妻木頼黄（よりなか）設計）の外壁の一部に使用されるなど、近代洋風建築の外装材として重要な位置を占めた石材でし

た。その名の由来は、真鶴町産の「小松石」のように灰色がかった色目のものが多い箱根山系の安山岩の中で、例外的に白い色味の石であることによるものと考えられます。ちなみに、「丁場」とは石材を採掘ないし採取する場所、すなわち石切り場のことです。この白丁場石について、同時代の石材産地の調査資料である清水省吾「神奈川県産建築石材試験報文」(『地質調査所報告』第44号、1913年12月、以下「報文」)と臨時議院建築局編纂『本邦産建築石材』(1921年、以下「石材」)により、その概要を見ていきましょう。

まず、この石材ないし丁場の名称について、「報文」では「白石丁場一名白丁場」、「石材」では「白丁場、白石(相州みかげ)」と記載されています。このうち、「相州みかげ」という表現は、白丁場石の性格とその役割を考える上で重要な意味を持っています。横浜正金銀行本店では、竣工時の建築概要を示した『横浜正金銀行建築要覧』(1904年)の記述によると、同建物の外壁のうち、コリント式の柱頭飾りや正面玄関・窓廻りなど細かな彫刻を施す箇所には茨城県産の花崗岩(かこうがん)を、2～3階の平らな壁の部分には白丁場石を使い分けていました(図5)。前述の日銀本店でも横浜正金と同様の花崗岩と白丁場石の使い分けがなされていました。このような使い分けがなされたのは、白丁場石が花崗岩に比して加工がしやすく相対的に低コストな石材であったことと、花崗岩と混用しても違和感のない白色の石材であったことがその理由ではないかと考えています。みかげ石(御影石)とは、現在の神戸市東灘区の御影地区がかつて花崗岩の主要な産出地であったことにちなんだ花崗岩の通称ですが、「相州みかげ」という白丁場石の別称は、花崗岩との代替関係のもとでさかんに使用された白丁場石の特徴を的確にあらわす表現として捉えることができるものと思われます。

次に、白丁場石の使用実績に関する記述です。「報文」は「近クハ東宮御所、東京帝国大学、日本銀行、横浜正金銀行、高輪岩崎邸ノ建築ニ使用セラレタリ」、「石材」は「東京ニ於テ日本銀行正金銀行其他大建築ニ此ノ石ヲ多ク使用セシ」と述べています。このうち、「高輪岩崎邸」こと岩崎彌之助高輪邸(現開東閣、1908年)は、日本近代建築の父であるジョサイア・コンドルが設計した大規模な邸宅建築で、基壇部分を除く大部分の外壁に白丁場石が使用されています。また、「東宮御所」(現迎賓館赤坂離宮、1909年、片山東熊(とうくま)設計)は外周部分の外壁はすべて茨城県産の真壁石が使われていますが、中庭に面した外壁には白丁場石が使われているようです。中庭部分の使用石材について、工学会編纂『明治工業史』建築篇(1927年)には「相州江の浦産の石材」と記載されていますが、今年8月の迎賓館参観で見学した際に、色味や輝石の入り方から白丁場石の可能性が高いとの感想を持ちました。本展のオープンまでにさらに調査を進めたいと考えています。

最後に、白丁場石の調査時点の「現状」については「旧日本鉄道海岸線ノ開通以来茨城県産花崗岩石材輸入ノ為メ其需用次第ニ減セリ」「採石漸ク困難トナリ工費著シク増大セリ」(「報文」)、「近来石山漸次採掘ノ困難ヲ来タシ以前ノ如ク採石易カラズ」(「石材」)と、茨城県の稲田や真壁産花崗岩の台頭という外的要因と、採掘上の困難の増大という内的要因により、大正時代には採掘量が減少しつつあったことがうかがわれます。「石材」は帝国議会議事堂(現国会議事堂、1936年)建設のための全国の主要建築用石材調査の報告書です。その建設にあたり、白丁場石は使用石材の候補としてリストアップされましたが、残念ながら外装材として採用されることはありませんでした。しかし、日銀本店の増築工事(1号館－1932年、2号館－1935年、3号館－1938年、長野宇平治設計)でも使用されたように、建築用材としての役割は昭和戦前期まで継続していたようです。

2011(平成23)年に調査で伺った際に、採掘当時を知る町民の方から白丁場石の切り出しは戦後の1960(昭和35)年ごろまで継続していたとの証言を得ましたが、その規模は明治時代の全盛期には遠く及ばないものだったと思われます。採掘が終了してから50年以上が経過し、地元でも忘れかけられた存在になってしまった「白丁場石」。その歴史を少しでも掘り起こすことができればと考えています。(丹治)

おわりに

ここで紹介した「七沢石」と「白丁場石」は、いずれも今は採掘が行われていない、いわば「過去の石材」のお話でした。しかし、神奈川県内には、鎌倉時代以降さかんに採掘されるようになった真鶴町の「小松石」のように、現在も採掘が続けられている石材も存在します。展示では、かながわの自然と大地の恵みの上に成り立ち、各時代の随所で輝いた“神奈川県産”の石とそれを利用した人々の営みを感じていただければ幸いです。(丹治)

(たんじ　ゆういち・主任学芸員)
(あらい　ひろみ・学芸員)

図１　七沢石を産出した鐘ヶ嶽（図１～３は 2015 年撮影）

図２　矢穴が入れられた石

図３　半谷石切場跡の碑

図５　当館建物外壁に使用された白丁場石
（青矢印が白丁場石使用箇所で赤矢印が花崗岩使用箇所。白丁場石の方がやや青味がかって見える。2004 年撮影）

図４　白丁場石の丁場跡
（白い岩肌が露出している箇所。2011 年撮影）

特別展

石とかながわ

―時代の変革を彩った石の文化―（仮称）

会　期：平成 28 年２月６日（土）～３月 27 日（日）
休館日：毎週月曜日（３月 21 日は開館）

発行：**神奈川県立歴史博物館**　〒 231-0006 横浜市中区南仲通 5-60　TEL 045-201-0926　FAX 045-201-7364
http://ch.kanagawa-museum.jp/　印刷：株式会社　Ｄ－サイト　発行日：平成 27 年 10 月６日